青年における人間関係調整スキルの特質
―ふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性に着目した分析―[1]

Characteristics of skills of adjusting interpersonal relationships in Japanese adolescents
―A comparison between commu-phobic tendency and anthropophobic tendency―

前　泊　麻理菜[2]
Marina Maedomari

要　約

対人恐怖的心性者は被害妄想的認知をする傾向があり，対人関係上の調整においても防衛的に振る舞う偏りが認められる。対人恐怖の亜型にふれ合い恐怖があり，正常者の中にもふれ合い恐怖的心性を示すものがいる。このふれ合い恐怖的心性者もまた被害妄想的認知傾向があるのかどうか，また，その傾向が対人恐怖的心性者と質的に異なるのかどうかを検討することが目的である。ふれ合い恐怖尺度の下位尺度である関係調整不全と対人退却の得点によって，“対人恐怖的心性群”，“ふれ合い恐怖的心性群”，および“良好群”の３群に参加者を分類した。その結果，他者の行動に被害的な自己関連づけを行う傾向は対人恐怖的心性群の方が良好群と比べて強いが，他方，他者の行動を警戒する猜疑心はふれ合い恐怖的心性群が良好群よりも強かった。つまり，被害妄想的傾向の内容は対人恐怖的心性者とふれ合い恐怖的心性者では質的に異なることが明らかとなった。自己意識と他者意識の傾向についても論じた。

キーワード：青年，対人関係調整スキル，ふれ合い恐怖，対人恐怖，被害妄想

１．目　的

青年期には，だれもがのちに社会人として自立した生活を営むために必要とされる様々なスキルを形成する。日常生活の自律的コントロールから仕事上必要とされる専門性の高い知識の獲得や活用に至るまで，様々な内容の学習が求められており，そういった学習は学校等の教育目的に含まれ指導・教育がなされている。なかでも長期間をかけて形成されるものの一つが対人関係を調整する能力である。ヒトは進化的に見て集団生活を営む社会性動物であり，他個体とのつながりが生きることの前提である（たとえば，長谷川・長谷川，2000）。われわれの実社会を見るなら，対人関係の調整能力は，職場内の人間関係や職場の雰囲気の形成にとどまらず，職業上（たとえば，営業や販売）の成績や顧客対応の質など，組織運営や経営に関するさまざまな問題とも関わる。本研究の関心は，そのような対人関係上のマネジメント能力の個人差にあり，次にこの点に目を転じて論ずる。

本研究では，ヒトの本性にかかわる対人関係調整スキルの個人差に焦点を当てるが，そのスキルの個人差の現れ方は一通りではない。たとえば社会的ひきこもりを示す青年は他者からの評価に敏感で，自分が傷つくことを極度に恐れ（斉藤，1998），そのような可能性を低めるために対人関係から退く（対人退却）という方法をとる傾向がある（岡田，2002）。これは対人退却という防衛的スキルが極端に現れた例であるが，正常の範囲でもう少しマイルドに現れる例もある。その心理的特徴は“ふれ合い恐怖的心性”と呼ばれる（たとえば，伊藤・村瀬・吉住・村上，2008；永山，2011；岡田，1993a，2002）。この心性をもつ青年が対人退却スキルを利用する強い傾向をもつ理由はなんであろうか。これを検討することが本研究の目的である。そこでまず，ふれ合い恐怖といわゆる対人恐怖との概念関係を以下において整理し，そののち問題と仮説を述べることにする。

対人恐怖は神経症の一種であるが，笠原（1993）によれば，他人と同席する場面で普通以上に強い不安を感じ，精神的に過度の緊張が生じる。同時に，他人に軽蔑されたり嫌がられるのではないかと心配になり，対人関係からできるだけ身を退こうとする特徴がある。ふれ合い恐怖はこの対人恐怖の亜型として位置づけられ（山田，1989；山田・安東・宮川・奥田，1987），対人関係上の困難さの訴えは従来の対人恐怖と共通している。しかし，ふれ合い恐怖では赤面や視線といった身体的訴えは主訴とならない点や，問題が発生する時期が対人恐怖とは異なる点で両者には差異が認められる（山田，1989）。また，対人恐怖症者が出会いの場で初対面から問題となるのに対し，ふれ合い恐怖症者は会食や雑談などふれ合い場面のみで発現して付き合いが長くなってから困難となるという違いがあり，それぞれ症状の発現が３人関係，２人関係で増強される（山田，1989；山田ら，1987；実験的検討としては永山，2011を参照）。たとえば，対人恐怖症者は２人関係は比較的自由に構成できる。しかしそこへ第三者が入ってきてそれまで自分が話していた相手と会話を始めると，自分が仲間外れにされたようで強い劣等感を覚え（笠原，1972），その第三者にどう思われるかという他者評価に関する不安が起こるという（笠原，1977）。一方，ふれ合い恐怖症者では，３人以上なら良いが，２人で食事をするとか雑談をすると，自分からふれ合いを深めなければならない責任やプレッシャーを感じて苦しくなるとの指摘がある（山田ら，1987）。このように，ふれ合い恐怖は対人関係上の困難を有するが，従来型の対人恐怖とは区別されるものである。

さて，先に触れたように，正常な青年にも“ふれ合い恐怖的心性”や“対人恐怖的心性”が認められ，両者の異同については質問紙調査や実験による研究がなされている（たとえば，伊藤・村瀬・金井，2011；伊藤ら，2008；永山，2011；岡田，1993a，2002）。たとえば岡田（2002）は，ふれ合い恐怖的心性を測定する“ふれ合い恐怖尺度”を作成し，2因子を同定している。それらは“関係調整不全”因子と“対人退却”因子である。対人恐怖的心性との関連を検討するために対人関係尺度（永井，1987，1994；永井・岡田，1987）も測定し，ふれ合い恐怖尺度との単相関分析を行った結果，対人関係尺度の３下位尺度と関係調整不全得点との相関は0.671～0.725であり，中程度から高い相関であった。対人退却とは0.350～0.611であり，弱い相関から中程度の相関であった。また，対人関係尺度とふれ合い恐怖尺度を込みにした因子分析の結果は上の単相関分析の結果を支持しており，対人退却因子は単独で同定されたが（同様の報告としては，伊藤ら，2008；永山，2011），関係調整不全の８項目中５項目は対人関係尺度の因子に含まれていた（ただし若干異なる報告として，永山，2011を参照）。このように，関係調整不全の下位尺度によって対人恐怖的心性を測定することが可能である。これに関連して，岡田（2002）によるクラスタ分析の結果も重要である。

ふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性の個人差レベルでの関連を検討するために，ふれ合い恐怖尺度および対人関係尺度の各項目得点を変量としたクラスタ分析を実施した。得られたクラスタは４つであり，そのうち２つがそれぞれふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性に対応するものであった（清水・海塚，2002も参照）。ふれ合い恐怖的心性に相当するクラスタは対人退却得点だけが高得点であり，関係調整不全や対人関係尺度の得点は低かった。他方，対照的に，対人恐怖的心性に対応するクラスタでは関係調整不全や対人関係尺度の得点が高く，対人退却得点は低かった。これらの結果も，先に述べたように関係調整不全下位尺度によって対人恐怖的心性を測定できることを示している。

比較的最近の研究ではふれ合い恐怖的心性と自己愛との関連が指摘されている。たとえば，ふれ合い恐怖傾向が高い者は，自分が特別優れていて他者と同列に扱われたくないという高い自負心（誇大的自己愛）と，孤高を保つために他者とのかかわりを避ける傾向があることが指摘されている（福井，2001，2003，2007）。岡田（2011）によれば，ふれ合い恐怖的心性と誇大的自己愛との関連は直接的なものでなく，誇大的自己愛から対人退却，友人関係に至るモデルがパス解析から得られている（伊藤ら，2011も参照）。つまり，現実の自分が素晴らしい存在であると認識するような顕在的な誇大的自己愛から直接的にふれ合い恐怖が生じるのではなく，本来自分が認められてし

かるべき（それが報いられていない）という意識から退却的な態度が生じ，友人との間で距離を置くような関係の在り方につながるという構造が示唆されたのである（岡田，2011）。ただし，他者の評価に敏感であるといった過敏型自己愛（Gabbard, 1994）の特徴は，傷つけあうことを回避しながら円滑な関係を志向する青年群に認められるが（岡田，2007），ふれ合い恐怖的心性者では円滑な関係への志向性は見られないので，過敏型自己愛はふれ合い恐怖的心性に関係ないと考えられている（岡田，2011）。

以上までにまとめたように，ふれ合い恐怖的心性を検討した諸研究に共通して認められるキーワードは“対人退却”である。岡田によれば，ふれ合い恐怖的心性をもつ者は他者の視線からあらかじめ退却したところで安定しているために，他者からの視線や自己内部の不安感があまり気にならないが（岡田，1993a），その背景には自分自身が傷つくことへの防衛が働いている可能性（岡田，2002）もあわせて指摘されている。つまり，対人退却を自己防衛の観点からみれば適応的とみなせるという解釈である。本研究でも対人退却を自己防衛のためのスキルとしてとらえ，以下のような仮説の検討を試みることにした。

山下（1997）によれば，対人恐怖症者は，自身の臭いや視線，表情などを対人関係の構築を妨げる欠点として捉えており，周囲の人の何気ない行動を自己の欠点と結び付け，関係妄想を抱く。妄想とは，DSM-Ⅳ－TR（APA, 2000）においては，外的現実に対する誤った推論にもとづく誤信であり，誤信に内在する矛盾を本人以外の殆どの人が理解し，矛盾を指摘する明らかな証明や証拠があるにもかかわらず強固に維持されるものとされている。また，“確信型対人恐怖”では，何でもない他者の行動に敏感に反応してしまい，確たる証拠もないのに自己に対する被害的認知を高めることが指摘されている（山下，1997）。このようなことから，対人恐怖的心性と関連するふれ合い恐怖的心性についても，被害妄想に近接の（正常範囲の）被害的認知との関連の有無が問題にされてよいであろう。例えば，人がヒソヒソ話をしていると，自分の噂話をしているのではないかと被害的に判断することが相当し，このような妄想様の考えを健常者ももつことはすでに指摘されている（丹野・石垣，1997；金子，1999）。この誰にでも見られ得る被害妄想的な傾向を金子(1999)は“被害妄想的心性”と定義し，その測定尺度の作成において，他者の何気ない行動に被害的な自己関連づけを行う“自己関連づけ”因子と，他者の行動に疑念をもち警戒する“猜疑心”因子を同定している。このような被害妄想的傾向とふれ合い恐怖的心性，および，対人恐怖的心性との関連は過去に検討例がないようであり，これを探索的に検討することが本研究の目的である。

永井（1994）は，青年期には，自己意識や他者意識が高まり，それらを強く意識しすぎると，対人恐怖的心性が高まると指摘している。一方で，岡田（2002）はふれ合い恐怖的心性が高い者の他者意識や内省力の乏しさを指摘している。両者の自己意識や他者意識の違いはふれ合い恐怖的心性を検討する上で重要な概念と考えられる。また，妄想を扱った先行研究においても，他者意識，自己意識の関連性が指摘されている（金子，1999; Fenigstein & Vanable, 1992）。対人場面で自己の被害的観念を強める要因として，他者からの視点，および自己への視点が大きく影響していると思われる。これらのことから，自己意識と他者意識も扱うこととした。

本研究では，ふれ合い恐怖尺度（岡田，2002）の下位尺度である関係調整不全と対人退却の得点によって，３群を事後的に設ける。関係調整不全が高く対人退却得点が低い“（従来型）対人恐怖的心性”群，下位尺度得点がその逆の関係になる“ふれ合い恐怖的心性”群，および，いずれの得点も低い“良好”群である。これらを独立変数とし，被害妄想的心性尺度（金子，1999）の得点を従属変数として１要因３水準の分散分析を行う。

２．方　法

参加者

福岡県と山口県の４年制私立大学３校の学生１年次から４年次生，計211名（男子96名，女子115名）が参加した。記入漏れのあった13人を除く，198人分のデータを有効とした。

材料

以下に示す尺度を用いた。

ふれ合い恐怖尺度　ふれ合い恐怖的心性を測定するために，ふれ合い恐怖尺度（岡田，2002）を使用した。対人的困難に関する17項目からなり，“対人退却”および“関係調整不全”の下位尺度で構成される。各項目について，「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の６段階で評定を求めた。データは得点が高いほど，対人退却傾向および関係調整不全傾向が強くなるように得点化した。

被害妄想的心性尺度　被害妄想的心性を測定する尺度として金子（1999）の“被害妄想的心性尺度”を使用した。全15項目で，“自己関連づけ”および“猜疑心”の下位尺度からなる。各項目について，“あてはまらない”から“あてはまる”の５段階で評定を求めた。データは得点が高いほど，自己関連づけおよび猜疑心が強くなる方向で得点化した。

自己意識尺度　自分自身に注意を向ける傾向を測定する尺度として菅原（1984）の“自己意識尺度”を使用した。全20項目で，“公的自己意識”および“私的自己意識”の下位尺度からなる。各項目について“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”の７段階で評定を求めた。データは得点が高いほど，公的自己意識および私的自己意識が強くなるように得点化した。

他者意識尺度　他者に注意を向ける傾向を測定する尺度として辻（1993）の“他者意識尺度”を使用した。全15項目で，“内的他者意識”，“外的他者意識”，および“空想的他者意識”の下位尺度からなる。各項目について，“全くちがう”から“全くそうだ”の５段階で評定を求めた。データは得点が高いほど，内的他者意識，外的他者意識，および空想的他者意識が強くなるように得点化した。

手続き

講義を利用して質問紙を配布した。回答は統計処理され，研究目的以外に使用されることがないと説明した。配布から回収までは20分程度であった。

分析

全対象者のデータを用いて，関係調整不全と対人退却の各尺度の中央値を産出し，前者の尺度得点が中央値よりも大きく，かつ，後者の得点が中央値未満の参加者をグループ化して“対人恐怖的心性群”，後者の得点が中央値よりも大きく，かつ，前者の得点が中央値未満の参加者を“ふれ合い恐怖的心性群”，いずれの尺度得点も中央値未満の参加者を“良好群”とした（Figure 1参照）。

従属変数としては，被害妄想的心性尺度の２つの下位尺度得点，自己意識尺度の２つの下位尺度得点，他者意識尺度の３つの下位尺度得点を用いた。下位尺度ごとに，１要因３水準の分散分析を行い，必要に応じてBonferroniの方法による多重比較（$p < .05$）を行った。

３．結　果

はじめに，基礎データとして各尺度間の相関分析の結果をTable 1に示す。対人退却と関係調整不全の相関（r）が0.60であり，岡田（2002）の

Table 1
尺度間の相関分析の結果（*N*=198）

	対人退却	関係調整不全	自己関連づけ	猜疑心	公的自意識	私的自意識	内的	外的
ふれ合い恐怖尺度								
対人退却								
関係調整不全	.60**							
被害妄想的心性尺度								
自己関連づけ	.27**	.50**						
猜疑心	.47**	.40**	.60**					
自意識尺度								
公的自意識	.15*	.51**	.42**	.14*				
私的自意識	.17*	.20**	.08	.04	.39**			
他者意識尺度								
内的	−.05	.17*	.26**	.14*	.41**	.50**		
外的	−.10	.23**	.19**	.08	.57**	.13	.40**	
空想的	−.01	.31**	.40**	.18*	.48**	.25**	.52**	.48**

* $p < .05$, ** $p < .01$

0.51と同レベルであった。最も関心があるのは，ふれ合い恐怖的心性の特徴である対人退却と被害妄想的心性との関連である。猜疑心とは0.47の中程度の相関が認められ，自己関連づけとは0.27の弱い相関であった。その他の尺度とは目立った相関は認められなかった。他方，対人恐怖的心性の特徴である関係調整不全については，猜疑心（0.40）と自己関連づけ（0.50）のいずれとも中程度の相関が認められた。その他の目立った相関としては公的自意識との間に中程度（0.51）の相関，空想的他者意識との間に弱い（0.31）相関が認められた。

次に，分散分析の結果を Table 2にまとめた。まず，対人退却得点に有意な効果が認められ（F [2, 116] = 112.67, MSE = 0.15），ふれ合い恐怖的心性群の得点が対人恐怖的心性群よりも有意に高く，対人恐怖的心性群の得点は良好群よりも有意に高かった。ふれ合い恐怖尺度の関係調整不全得点についても有意な効果が認められ（F [2, 116] = 65.48,MSE = 0.26, Figure 1），対人恐怖的心性群の方がふれ合い恐怖的心性群よりも得点が有意に高く，ふれ合い恐怖的心性群は良好群よりも有意に高かった。群間の差異は予想通りであり，群分けは妥当と考えられる。

被害妄想的心性尺度の自己関連づけ得点に有意な効果が認められ（F [2, 116] = 7.80, MSE = 0.94, Figure 2），対人恐怖的心性群の得点の方が良好群よりも有意に高かったが，良好群とふれ合い恐

Table 2
尺度ごとの各群の平均値±標準誤差と分散分析の結果

尺度	各群の平均値±標準誤差			分散分析	
	良 好（n=74）	ふれ合い恐怖心性（n=24）	対人恐怖心性（n=21）	F 値（df=2,116）	多重比較（Bonferroni,p<05）
（ふれ合い恐怖）					
対人退却	1.65 ± .04	3.01 ± .10	1.92 ± .06	112.67***	良好 < 対恐 < ふ恐
関係調整不全	1.74 ± .06	2.04 ± .12	3.18 ± .10	65.48***	良好 < ふ恐 < 対恐
（被害妄想的心性）					
自己関連付け	2.21 ± .12	2.52 ± .19	3.16 ± .19	7.80***	良好 < 対恐
猜疑心	1.63 ± .10	2.25 ± .17	1.96 ± .12	5.70**	良好 < ふ恐
（自己意識）					
公的自己意識	3.91 ± .14	4.12 ± .23	5.38 ± .21	13.15***	（良好・ふ恐）< 対恐
私的自己意識	4.36 ± .14	4.43 ± .19	4.68 ± .24	0.63	—
（他者意識）					
内的他者意識	3.31 ± .08	3.10 ± .15	3.66 ± .18	3.65*	ふ恐 < 対恐
外的他者意識	3.15 ± .09	2.81 ± .19	3.71 ± .16	7.72***	（良好・ふ恐）< 対恐
空想的他者意識	2.82 ± .09	2.70 ± .17	3.54 ± .19	7.52***	（良好・ふ恐）< 対恐

注）*p < .05, **p < .01, ***p < .001, ふ恐＝ふれあい恐怖，対恐＝対人恐怖

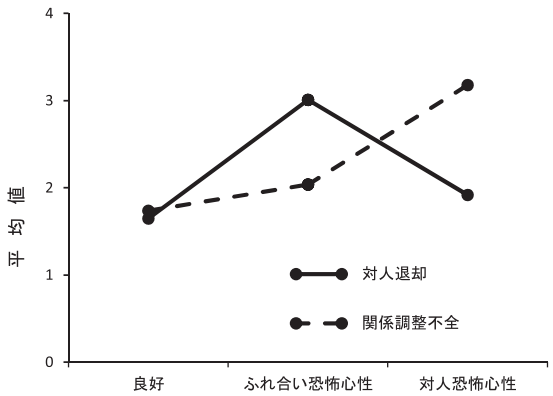

Figure 1．各群のふれ合い恐怖尺度平均得点

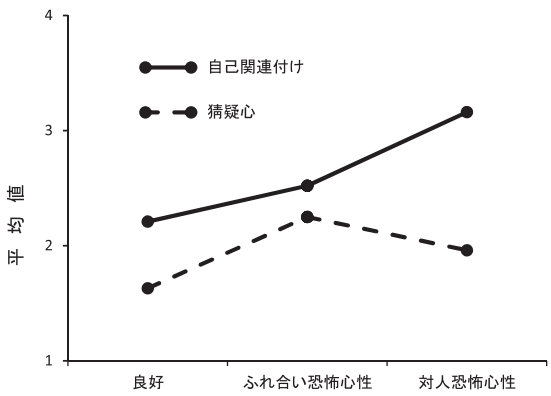

Figure 2．各群の被害妄想的心性尺度平均得点

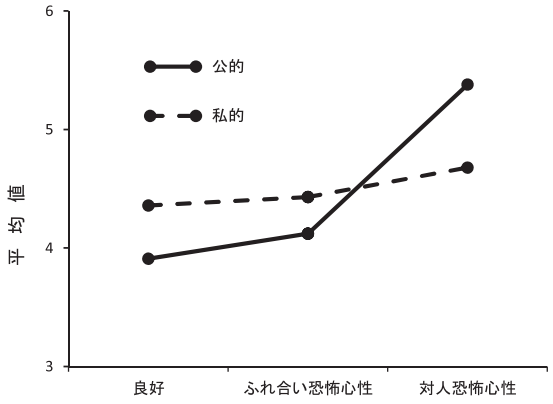

Figure 3．各群の自己意識尺度平均得点

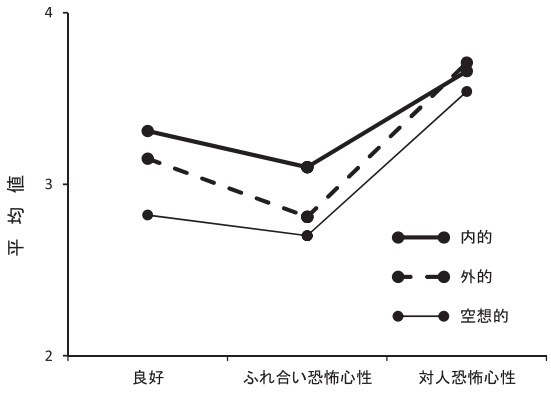

Figure 4．各群の他者意識尺度平均得点

怖的心性群との間に有意差はなかった。猜疑心についても有意な効果が認められ（F [2, 116] = 5.70, MSE = 0.65），ふれ合い恐怖的心性群の得点の方が良好群よりも有意に高かったが，良好群と対人恐怖的心性群との間に有意差はなかった。すなわち，被害妄想的心性に関して，ふれ合い恐怖的心性群と対人恐怖的心性群との間に質的な差異が認められた。

自己意識尺度における私的自己意識得点については有意な効果は認められなかった（F [2, 116] = 0.63, MSE = 1.30, Figure 3）。公的自己意識については有意な効果が認められ（F [2, 116] = 13.15, MSE = 1.36），対人恐怖的心性群の得点が他の２群よりも有意に高かったが，良好群とふれ合い恐怖的心性群との間に有意差はなかった。

他者意識尺度における内的他者意識得点について有意な効果が認められ（F [2, 116] = 3.65, MSE = 0.49, Figure 4），対人恐怖的心性群の得点の方がふれ合い恐怖的心性群よりも有意に高かったが，ふれ合い恐怖的心性群と良好群の間に有意差はなかった。外的他者意識得点（F [2, 116] = 7.72, MSE = 0.60）と空想的他者意識得点（F [2, 116] = 7.52, MSE = 0.66）にも有意な効果が認められ，いずれにおいても対人恐怖的心性群の得点が他の２群よりも有意に高く，良好群とふれ合い恐怖的心性群の間には有意差はなかった。

４．考　察

本研究の目的は，ふれ合い恐怖的心性と被害妄想的傾向との関連の有無，および，そのパターンが対人恐怖的心性と被害妄想的傾向との関連と異なるのかどうかを検討することであった。

まず，ふれ合い恐怖尺度と被害妄想的心性尺度との相関関係を述べる。ふれ合い恐怖的心性の特徴である対人退却は自己関連づけ（r = 0.27）よりも猜疑心（r = 0.47）とより強い相関を示した一方，対人恐怖的心性の特徴である関係調整不全については，猜疑心（r = 0.40）と自己関連づけ（r = 0.50）のいずれとも中程度の相関を示した。ふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性は被害妄想的傾向に関して異なる関連を有することが示唆される結果であった。

事後的に分類した３群の比較の結果は，ふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性の被害妄想的傾向に対する異なる関連性を明確に示すものであった。他者の何気ない行動に被害的な自己関連づけをおこなう傾向は，良好群と比べて対人恐怖的心性群の方が強く，他方，他者の行動に疑念をもち警戒する猜疑心については，ふれ合い恐怖的心性群が良好群と比べて強かった。すなわち，被害妄想的心性に関して，ふれ合い恐怖的心性群と対人恐怖的心性群との間で質的な差異が確認された。

対人恐怖的心性群が自己関連づけをおこなう傾向があることは，金子ら（2003）を支持する結果であった。対人恐怖的心性をもつ者は他者の何気ない行動に気を配り，被害的に解釈する傾向が認められた。また，他者意識，自己意識についても対人恐怖的心性をもつ者はほかの２群に比べて得点が高く，岡田（1993a）と一致する結果であった。他者へ向ける意識や自己への関心の高まりにより，他者の言動に対して敏感になっていると考えられる。

一方，ふれ合い恐怖的心性群は猜疑心得点が良

好群に比べて高かった。すなわち，ふれ合い恐怖的心性をもつ者は，本研究で予測していたように他者への警戒心が強く，他者とかかわると，何らかの不利益を被ると考え，他者と必要以上に親密にならないように気をつけていると考えられる。また，自己意識や他者意識については，ふれ合い恐怖的心性群と良好群との間に差はなく，これらの結果は岡田（1993a）と同様であった。岡田（1993a）が指摘しているように，他者の視線からあらかじめ退却したところで安定しており，他者からの視線があまり気にならず，自己内部の不安が低い状態と考えられる。他者に疑念を抱いたり警戒したりはするが，他者と深く関係をもたなければ自分自身が傷つくこともないため，他者に関心を向ける必要がないと感じている可能性が考えられる。他者と深くかかわるためにはある程度の自己開示が必要となる。普段から自分の内面に関心がむきにくいふれ合い恐怖的心性者にとっては，困難で勇気がいる作業になると思われる。そのため，他者と深く付き合うこと自体を回避していると考えられる。

以上より，対人恐怖的心性者もふれ合い恐怖的心性者も他者に対して被害的認知をする傾向がある点では共通しているが，その内容は異なるようである。対人恐怖的心性者は，他者の言動に敏感になり，その言動が自分に向けられていると感じて対人関係に困難をきたす。一方，ふれ合い恐怖的心性者は，他者への警戒心が強く，傷つけられるかもしれないと恐れて表面的な関係しか築けなくなってしまうようである。

実社会に目を転ずれば，一口に“人づきあいが苦手”という社員がいたとしても，それが自己防衛によるもの（≒対人退却）なのか誤った思い込み（≒自己関連づけの妄想）によるのかが異なり，彼らに対して求められる対応（指導）も異なり得る点は，本研究によって示唆された有用な知見である。また，表面的な関係を築くことを肯定的に評価し，ある程度の距離を保ちながら人間関係が築けるわけであるから，これは社会人になったときにむしろ必要なスキルとみなすことも可能であろう。

最後に今後の課題について触れておきたい。本研究ではふれ合い恐怖的心性と対人恐怖的心性の被害妄想の内容が異なることが示された。今後は，ふれ合い恐怖的心性が高い者の猜疑心について細やかな質的検討が求められる。また，強い猜疑心を抱く要因についての検討も必要であろう。さらに，ふれ合い恐怖を現代青年の特徴と捉えるべきか，対人恐怖の亜型と捉える方がよいのかの検討も行っていく必要があると考えられる。

引用文献

American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition Revised:DSM Ⅳ -TR*. Washington, DC: Author

Fenigstein, A, & Vanable, P.A, 1992 Paranoia and self consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 522-527.

Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic Personality in clinical practice. The DSM- Ⅳ edition.* Washington, DC: American Psychiatric Press

福井康之　2001　新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み　心理臨床学研究，19，477-488.

福井康之　2003　女子青年のふれ合い恐怖と外見恐怖　人間心理学研究，21，187-197.

福井康之　2007　青年期の対人恐怖―自己試練の苦悩から人格成熟へ　金剛出版

長谷川寿一・長谷川眞理子　2000　進化と人間行動　東京大学出版会

伊藤亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上隆　2008　現在青年における“ふれ合い恐怖的心性”と抑うつおよび自我同一性の関連　パーソナリティ研究，16，396-405.

伊藤亮・村瀬聡美・金井篤子　2011　過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖的心性に及ぼす影響について―自己愛的脆弱性尺度を用いた検討　パーソナリティ研究，9，181-190.

金子一史　1999　被害妄想的心性と他者意識および自己意識の関連について　性格心理学研究，8，12-22.

金子一史・本城秀次・高村咲子　2003　自己関連付けと対人恐怖的心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連　パーソナリティ研究，12，2-13.

笠原嘉　1972　正視恐怖・体臭恐怖―主として精神分裂病者との境界線について　医学書院
笠原嘉　1977　青年期―精神病理学から　中公新書
笠原嘉　1993　対人恐怖　加藤正明・笠原嘉・小此木啓吾・保崎秀夫（編）新版精神医学事典　弘文堂　515.
永井徹　1987　対人恐怖的心性とパーソナリティに関する研究―ロールシャッハ・テストを中心に―　心理測定ジャーナル，23，14-19.
永井徹・岡田努　1987　対人恐怖的心性の構造に関する研究　日本心理学会第51回大会発表論文集　534.
永井徹　1994　対人恐怖の心理―対人関係の悩みの分析―　サイエンス社
永山智之　2011　二者状況と三者状況における体験から見たふれ合い恐怖的心性・対人恐怖的心性　京都大学大学院教育学研究科紀要，57，195-209.
岡田努　1993a　現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係　発達心理学研究，４，162-170.
岡田努　2002　現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究，10，69-84.
岡田努　2007　大学生における友人関係の類型と，適応及び自己の諸側面の発達の関連について　パーソナリティ研究，15，135-148.
岡田努　2011　現代青年の友人関係とふれ合い恐怖的心性　再考　日本教育心理学会第53回総会発表論文集，222.
丹野義彦・石垣琢磨　1997　妄想症状の構造の試み　日本心理学会第61回大会発表論文集，162.
斎藤環　1988　社会的ひきこもり：終わらない思春期　PHP 研究所
清水健司・海塚敏郎　2002　青年期における対人恐怖的心性と自己愛傾向の関連　教育心理学研究，50，54-64.
菅原健介　1984　自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成試み　心理学研究，55，184-188.
辻平八郎　1993　自己意識と他者意識　北大路書房
山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子　1987　問題のある未熟な学生の親子関係からの研究（第２報）：ふれ合い恐怖（会食恐怖）の本質と家族研究　安田生命社会事業団研究助成論文集，23，206-215.
山田和夫　1989　境界例の周辺：サブクリニカルな問題性格群　季刊精神療法，15，350-360.
山下格　1997　対人恐怖の病理と治療　精神科治療学，12，９-13.

脚注

１　本研究は東亜大学大学院平成21年度修士論文の一部を改変したものである。

２　研究の実施にあたり，東亜大学大学院の武安ヨシエ先生と桑野裕子先生にご指導を頂きました。記して感謝申し上げます。また，岩手大学の岩木信喜先生にも貴重なご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。